

わかれみち

解析 佑太

二年前に補欠選に初めて立候補をした私、白田淳は高齢者に優しい街造りをスローガンにして、選挙戦を戦ってきた。

実際にお年寄りの方達からの支持を受けて選挙は圧勝した。

繁華街の道路拡張、駅前周辺の一方通行化の実施を進める事を必ずやります、見ていて下さい。取材に来ていた当選直後のテレビカメラに向かって豪語していた。

地元の人達の期待度も理解している。

意気揚々と議会に乗り込んだは良いが、そこはやはり村社会。

当選回数に比例して発言権が与えられている、そんな印象を持った。

コネも実績も無い若輩者の発言に対しては舌打ち、ため息しか聞こえて来なかった。私は支持して下さった市民の為に力を尽くさねばならないのだ。

任期中から新人に余計な事をされたくないのだろう、頻繁に他府県に視察に行かされ先輩議員の鞆持ちの様な扱いを受けていた。

先々では夜な夜な繰り返される飲み会。

お酒を注いで周るがその度に説教をされる。

慣例か何か知らないが、支払いはいつも新人である私の財布から出て行く始末だ。タダで転ぶ訳にも行かない。

現在の議会での状況や個々が考えていることを知る為に、萬長をはじめ時には自分より年下の先輩議員にも頭を垂れ続けていた。

傍から見れば情けなく映るであろう姿で有ることは解っている。

これも支持して下さっている市民の方達の為だ。自分にそう言い聞かせながら。暫くすると私を煙たがる者は議員の中にはいなくなっていた。

少しずつではあるが、意見も通るようになり居心地もそれ程悪くは無くなっていた。ある日議長と古参の議員数名と私とで、山手に新設する老人養護施設の事で地元住人と話し合う為に建設場所周辺の集会所に出かけた。

そこは、私を後援して戴いている地元でもある。

その日、市役所で時間が来るのを待っていた時、議長が話しかけて来た。

「白田君は、駅前の再開発を掲げていたが、どうしたいんだ」

「はい、駅前は主要道路の割りに幅も狭いので、慢性的に渋滞が起きていますので」

「そんな事は誰でも解っておる。で、どうしたいんだ？ と聞いておるのだ」

「はあ、やはり歩道幅を広げるのは必須かと考えています。出来なければ一方通行化を」

私の話にあまり面白味が無い様で議長は煙草に火を付けて思い切り煙を吐き出す。

「それは出来んなあ、仮にお前さんが周辺住人を説得出来ても、だ。いったいどれ程の時間と金と人出がかかると思っとるんだ」

私の言葉を遮る様に他の議員達は止めておけ、と言いつつ。

「駅前には商店街も有る。一方通行にすれば人の通行量も減る。これは死活問題だ」

そこは、駐車を整備すればクリア出来る、まずは歩行者の安全が第一ではないのか。

「路線バスの巡回絡も変えなきゃならん、バス会社との折衝もしなければならんぞ。？」

解っています、そこを面倒だからと言って手を抜くことは有り得ない。

「大体君は、何故道を広げたがるんだ？ 君の言っている事は正論だが、見方が偏っている、とは思わんか？」

議長は私の目をジッとみてそう言った。偏っている？

「根本的に若者と年寄りとは生活のサイクルが違うから、ワシは道路を拡張する意味合いが薄いと思っておる。それよりも老人達が乗る自転車やバイクの暴走が増えんじやないかと危惧しておる。事故が増えれば自然と渋滞が増える事になる」

「今までの議長の経験からその様に考えておられるのですか？」

「何をしたいか、何を見ているかで取るべき行動は変わると考えておるだけだ。遠まわしにお前には無理だから止めておけ、そう言われている気がした。

「この街は田舎のままでも良かったのに」

議長は椅子から立ち上がり、スーツの上着に袖を通した。出発の時間が来たのだ。

私は先輩議員達の鞆を持って一番最後に玄関に向かった。

そこにはタクシーが一台待っており、順番に乗り込んで山手の集会所に向かった。市役所を出て暫くすると渋滞の原因の一つである踏切につかまってしまった。

「しかし、本当に長いですね」

私の言葉に真っ先に反応したのは議長だった。

「キミは電車に乗ることはあるかね？」

会社務めの間は毎日乗っていたが議員になってからは乗ったことが無かった。

「それでは、渋滞の原因が何か解ってないんじゃないのか？」

他の議員達もクスクス笑っていた、先輩の一人がこう続けた。

「はあ、それでよく渋滞緩和だなんて言えるよな。昼間に一度乗ってみなよ」

一度で？ そんなに解りやすい原因が有るならなぜ改善しないんですかと聞くと、

他の議員達も大笑いしだした。

「今度見てくればいい。ワシの娘が家で暇そうにしておるから、一緒に行くといい」

ええっ、それってデートですか？

先輩議員からは羨望の声があがった。

「おい、議長のお嬢さんは、K大出の才女だぞ。お前には勿体ないほどだ」

私はふと議長の顔を見た。すると、今までと違い優しい表情で、

「ワシももう若くないのでな。せめて孫の顔を見ておきたいのだ」

「議長……」それ以上は言葉が出ない。

そんなに私の事を。

今までは議長の気持ちも知らずに、楯つく様なことばかり言っていたのに。

私は間違っていたのか。

「話は変わるが、今日の議題の件、キミがメインになって進めてくれんかね」

力強く「はいっ」と返事をした私に皆は協力する事も約束してくれた。

長かった踏切も上がり、タクシーは再び山手に向かって走り出した。

自治会館に向かう途中に建築中の巨大なコンクリートの塊が見えて来る。

建設中の老人養護施設だ。

山手の自治会館に着くと、地元の方達が数名出迎えてくれていた。

自治会の奥様方をお願いして一緒にお茶を入れてしていると辺りから老後施設について

色々要望が聞こえて来た。

まあ、元々はここに有った竹やぶの所有者が亡くなられて物納された膨大な広さの土地であり、建て売りやマンションを建てる訳にもいかず、市の提案でここに施設

を建てる事になったので、こちら辺に住んでいる人達なら知っているはずなのだが、長引くとまずい気がしたので急いでお茶を待合室まで持って行くことにした。

「お待たせしました」私は恐る恐る議長の前にお茶を置いた。

「うむ」茂長はぬるくなったお茶をグビグビと一気に飲み干した。

そこにスーツに身を包んだ方達が我々の部屋にやって来て挨拶をする。

建設に携わる企業の方達の様だ。私も挨拶を交わし、名刺の交換をした。

「白田君、これを渡しておく」

議長はそう言って今日の説明会用の資料を差し出した。

「そろそろ、お時間ですので先生方よろしくお願いします」

地元の奥様がドアを少し開けて我々を呼びに来た。

集まっている人のほとんどが年配の方たちだ。

若い年齢層の連中はなぜ来ないんだろう。興味がないのか？

「今日は皆さまお忙しいところをお集まりくださいまして、誠に有り難うございます」

まずは私から軽く挨拶をして、集会はスタートした。

苦情はまあ、どこの街でも同じような事は出て来るだろうから予め予想はしている。

話し合いは地元の住人の質問や要望に議員や建設業者が答える形で進んで行った。

意見が多かったのが通勤・通学時間の安全と未だに手つかずの施設横の空き地の利用方法だった。

施設の周辺は竹やぶである。しかも山手の為、曲がりくねった坂道を皆自動車、バイクなどを使って通勤している。しかもかなりのスピードで。

そこに巨大な建造物が出来るのである。今より死角が大きくなるため、事故が増えるのではないか、という不安な意見も出ている。

もっともな意見だが、言い方が腹が立つ。

「あなた、駅前の事しか言わないが地元の為に働いてないじゃないか」

とりあえず笑顔でやり過ごしてはいるが、今ここで言わなくても良いじゃないか。

大体、交通ルールを守っていれば最低限の安全は確保出来るんじゃないのか？

空き地の使い方もうさだ。あれを建てる、これを建てる、買い手が見つからないのはお前達の努力が足りないんだ、あまっているのならウチに寄贈しろ、など言いたい放題だ。

数人がこんな風に私的意見をいいはなつモノだから、それなら俺にも言わせろ、となる。

結局話は脱線が続けてしまい、うやむやの内に集会は終了してしまった。

これじゃ話が前に進むはずが無い。

こんな資料を渡したトコロで読んでくれているのかも疑問だ。

勝手な解釈で文句を言われるのがオチだ。

こんな人達に今まで支援されていたのか。

「本当に、ココは相変わらずですよね」

先輩議員の一人が呟くと議長もフンツと口の片方を釣り上げた。

帰りのタクシーが来たらしく、その旨を奥様が伝えに来ると玄関に向かった。

車内で私は先程の話の続きを尋ねてみた、相変わらずとはどの様な意味が有るのか。

「あそこの老人達は言う事が二転三転するのさ。さっき言った事を平気で言い換えやがる」

ずっとこの地区で育ってきた私は、慣れてしまっていて感じにくくなっていたのだろう。

「このままじゃ工期に支障をきたしかねん。来週もう一度集会を開こう」

議長は携帯端末でメールを打ちながらそうつぶやいた。

もう一度話し合いをしても納得してくれないだろうなあ。

自然とため息が出て来た。そこに横に座っていた議長が僕に携帯の画面を見せて来た。

「明日の午前十時、駅に行きます。」議長のお嬢さんからだった。

駅周辺の渋滞の原因を調査して来い、そう言う事だな。

「あの、良いんですか？ 本当に……私で」

皆は飲みに行くと言っていたのだが、私は帰って明日の準備をする事にした。

次の日の日曜日、約束の時間よりも早く駅に到着した私はマックに入りコーヒーを飲んで携帯端末でニュースを読んでいた。

日曜日の朝十時、この時間帯に駅にいる人達はどんな人達だろうか、エスカレーターに

乗っている人は、奇麗にメイクを決めた若い女性、中学生くらいの女の子の集団だっ

たが。

券売機の見える位置で私は足を止めて人の動きを眺めていた。

おかしいな、高齢の方達の人数が多い、さっきとは違う風景だ。

そうか、エレベーターを使って上って来たのだな、それにしても結構な人数だな。そこに女性が現れた。

「おはようございます。白田先生ですね。」

リクルートスーツに身を包んだその女性は私に深々と頭を下げる。

「はじめまして。吉岡かおりと申します。本日は先生のお手伝いをするよう父に言われて来ました。よろしくお願い致します」

かわいい。この人があの議長のお嬢さんか？

見るからに真面目そうだ。仕事をやりに来ていての雰囲気はヒシヒシと伝わって来る。「おはようございます、白田です。私の方こそよろしくお願い致します」

事前に考えていた調査方法を彼女に伝えてさっそくホームに向かう事にしたが、先程からお年寄りの方達がキップを買うのに苦勞をしていて、人だかりは増える一方だった。

「しばらく待ちましょうか。」

そう伝えると彼女は自分の鞆からシステム手帳とデジタルカメラを取り出した。

彼女は改札口周辺、券売機やエスカレーターを使っている人達の写真を撮りだした。ストップウォッチで時間を計ってはまた記入していた。

私はひたすら人の動きを眺めていた。興味が有ったのは後から来た若者たちの反応だ。

明らかに老人達にイライラしている。列に並んでいるのに一向に切符が買えないからだ。

デートの約束でもしているのだろう、急いでいるのが手に取る様に解る。

そんな事は一切お構いなさだ。老人たちは行き先までの運賃を確認して財布を取り出し、

お金を券売機に入れて行く。時には駅員を呼び何やら言っている。

切符一枚買うのに一体どれくらい掛かっているんだ、これでは待たされている人はたまったものではない。

「一人につき約六分かかっていきますね」

さっきの若者はようやく切符を買い、走って改札を抜けて行った。

「さすがに何時間も待たされる事は無いとは思いますが、こたえるでしょうね。電車乗り遅れる訳ですから。」

「そうだね、こうやって見ていてだけで切符買う気無くなるもん。」

私の言葉に彼女はクスツと笑ってこう聞いて来た。

「その後はどうするんですか？ 仮に私と待ち合わせしていたら、やっぱり電車に乗るのをやめちゃいますか？」

ドキツとして返事に困っていると変な意味じゃありませんと言ってくれた。

「父が変な事言っていますか？ ひょっとして迷惑じゃありませんでしたか？」

「いやいや、迷惑だなんて、とんでもない。ちょっと想像していたより綺麗な方で、面を喰らってしまつて」

暫くの間の沈黙。まずい空気だ。

「……切符買ってきますね」

私は小さな声ではい、と答えた。

改札を抜けて階段でホームに降りて行く。

電車が来てドアが開き、乗ろうとすると車両の奥から人がノロノロ出て来る。

そこに駆け込み乗車する為にもものすごいスピードで若者が走って来る。

「危ないなあ」思わずそう言ってしまった。

奥から人が降りて来る、老人がゆっくりと乗車する、まだ間に合うと思ひ、駆け込み乗車をする人が現れる。悪循環だ。

駅員もイライラしていた、そりやそうだろう、一向に電車が出れないのだから。

「なるほどねえ、議長の言っていた事、解ったよ」

電車が行かなきや踏切は上がらない訳だから、そりや渋滞も出来るわ。

何本か電車が来るのを待ち、停車から発車までの時間を計測し、乗降の人数を数えて行く。

どれにも必ず発生しているのが駆け込み乗車だった。

「白田さん、資料をまとめたのでドコかに入りますか？」

「ええっ、この後は何処かに行かないんですか？」

私の質問に不思議そうな顔をする彼女。

「……じゃ、戻りましょうか」

階段を上り、改札を抜けて駅前には有るコーヒーショップに入ることにした。

コーヒーを二つ購入して、二階の窓際に座ると、彼女はすぐさま資料をまとめ出した。

「白田さんは先程の駅の状態を見られてどう思われましたか？」

私の思い描いていた状況とは確かに違っていた。想像以上に酷い状況だった。

明らかに高齢者と他の年代の人とはペースが違っていた。

歩くスピードも、キップを買うスピードも、電車に乗るスピードも。

渋滞を緩和する、言うのは簡単だが実際にそれをやろうとしても何から手を出して

いいのか、決定的な打開策を示せる事がはたして私に出来るだろうか。

そう考えていると彼女の質問にすぐに答える事が出来ないでいた。

「高齢者用の専用窓口を作ってみてはどうだろうか」

つい思いつきで物を言ってしまった、これじゃ何の解決策にもならない。

「……なるほど、では、電車の乗降はどうしましょう、高齢者用の電車を走らせれば良

いのでしょうか？」

電鉄会社がウンと言うはずが無い。

この街は大阪と京都の境に有る為、通勤・通学の便が良く、人口の増加に伴い停車する本数も増えて行った。道路もこんなに渋滞する事も無かったし、人がこんなに急ぐ事も無かったのだ。

駅前の人通りを制限すると商業的にも成り立たなくなるのは解っているしなあ。

のんびりと暮していればこんな不具合は出なかったかもしれない。

「駆け込み乗車を制止して電車を定刻通りに発車させれば踏切も直ぐ上がって渋滞しなくなるんじゃないかな」

彼女はタブレットをテーブルに置いてコーヒーを飲み、私に言って来た。

「短絡過ぎませんか？ それだけで周りを納得させるには弱いと思います」

なぜ人は駆け込み乗車をするのか、を説明出来なきゃいけないって事か。

「わたしね、この街って住みにくいなって思っているんです」

いきなり彼女は私的な意見を口にしました。

「どうしてそう思うんです？」

「だって、どれだけ自分が時間を決めて、守って行動しても渋滞に捕まっちゃうで

しよ?」

電車に乗っても今日の様な事が頻繁に起こって待たされてばかり」
彼女の言っている事は正論だとは思う。

時間に余裕が有る時は我慢も出来るがいつもあんな様子だと嫌になるだろう。

「そこまで我慢して生活してしなければならぬモノですか?」

愚痴か? 文句か? 疑問か? 彼女はどの様な意味で聞いているのだろうか。

「それを緩和する為にこうして調査をしているんじゃないでしょうか」

私は逆に彼女に質問する様に返事をした。

「白田さんの高齢者に優しい街づくり、と言う政策は素晴らしいと思います。実現すればとても素晴らしい事だと思います。けど……」

けど、なんだ? 無理だとしても言いたいのだろうか。

「それはご自身が何かを体験されての政策ですか? 誰かに言われてはいませんか? だとしたら、後々違った意見を言われるのでは? こんな望んでなかったのに、とか」

昨日の自治会での集会を思い出した。

「仮に道を拡張しても、駅の混雑を減らしても他の誰かから文句を言われるって事?」

彼女は黙って頷いた。

「これは私的な意見ですけど、我々と同世代の人と高齢者の世代の共存は難しいのではないかと。明らかに生活のペースが違いすぎます。白田さんも先程ご覧になりましたでしょ」

「いや、それは同意出来ないなあ。確かに待たされる人の気持ちも解るけど、高齢の方達に優しい社会じゃないと。だってこれから益々高齢者が増えて行くんだよ?」

「では、若年層は置き去りにしても良い、と仰るのですか? この社会全体が高齢者に合わせてゆつくりとすればいいと? 高齢の方はもう定年も過ぎているんですよ? そちら側に合わせてしまうと経済が成り立ちません」

「そんな事は解っているよ!」

私は明らかにムキになっていた。どう言えば納得してもらえるのだろうか。コーヒーのおかわりを買いにいって、暫し休息を取る。

「アンケートでも取ってみるか。

何気ない一言に彼女の表情がパァッと明るくなった。

「いいですね。やりましょう」

駅前での渋滞について市民の皆さまの声をお聞かせ願いたい、がテーマだ。

朝の駅前にて用紙を手配りして、時間が有るのならその場で記入してもらい、そうでないなら帰宅時に回収箱に入れてもらい内容を把握して実現可能な策として議会に乗せる。

事前準備として駅に回収箱の設置をお願いしておくのと、議長をはじめ先輩議員達にも情報は予め流しておく。

土曜日に行く自治会との話し合いまでには間に合わせる為にもすぐに取りかからなければ。

彼女とアンケートについて話し合った。

記入しやすい様に工夫をして、出来るだけ興味を持ってもらい、出来るだけ多くの市民の声を聞ける様にするにはどうすれば良いかを真剣に話し合った。

「後はアンケートの内容を吟味して方策を決めて行けば」

「そうですね、けど、大事なのは白田さんが『どうしたい』かですよ」

彼女はにっこりとほほ笑んだ。力強く背中を押された感覚を覚えた。

案もまとまったところで家に帰りアンケート用紙の制作にかかる事にした。

「私はコピー用紙を買いに行ってきますのでここで」そう言ってコーヒーショップを出た。

が、そこで事件は起こった。

きゃあ！ 私の右手を歩いていた彼女に老人が乗った自転車が激突したのだ。

彼女は腰から崩れ落ち、私の目の前に倒れ込んだ。

「大丈夫ですか？救急車を呼びますから、じっとしておいてください」

あれ、自転車は？ どこにもいない、当て逃げか。

老人は彼女にぶつかって、そのまま何処かに消えて行ったみたいだ。まさか、気がついていないのか？ 馬鹿な。

彼女は右足を痛そうに押さえてじっとしていた。大丈夫ですから救急車は呼ばなくていいです、と言っているが明らかに痛そうにしている。

「家まで送ります。タクシー乗り場まで歩けますか？」

彼女の鞆を持ち、腋に腕をまわして彼女を支えて歩き出した。

ちょうど乗り場にタクシーが何台か停まっていたのでスナリと乗る事が出来た。

「吉岡一徳」の表札がかかった門が有るでかいお屋敷。ここが彼女の自宅である。タクシーを降りて彼女の補助をしながら呼び鈴を押すと空いている門から白髪交じりの男性がこちらにやって来た。議長だ。

最初はゆっくりとした歩調だったが、私達の異変に気付いたみたいで、慌てる様に走って門まで迫って来た。

「どうした、なにが有ったんだ」

「ちよっと転んだだけよ、大したことじゃないから心配しないで」
いつもどっしり構えている議長が明らかに動揺している。

「申し訳ありません、私がついていながらお嬢さんに怪我をさせてしまいました」
私は殴られるのを覚悟して深々と頭を下げ謝罪した。

「きさまあつ！」

議長の言葉には物凄い殺気が籠っていた。

「違うの、悪いのは私なの。白田さんは私を送って下さったの。怒らないであげて
パパ」

「パパ？ いや、それは今は触れてはならないだろう。彼女の言葉で冷静さを取り戻した議長は大声で誰かを呼んだ。

家の中から奥様らしい方が出て来られて彼女を連れて行った。

「……上がれ、茶でも飲んで行け」

頭を下げたままの私に議長は声を掛けた。沸点も下がったみたいだったので一安心だ。

議長に促されてリビングに入り、高級そうなソファに腰かけた。

「どういう事か説明しろ」座るなりドスの利いた声で問い詰められたので今日二人で行った事、事故に遭った経緯を説明した。

「なるほど、解った。君を疑って悪かった。許してくれ」

話を聞いて一応の納得をしたようで、議長は私に頭を下げた。

そこに足を引きずりながらおりさんがリビングに入って来た。直ぐ後に奥様も来られたので立ち上がり頭を下げ、もう一度謝罪の言葉を口にした。

「大丈夫です。少しひねっただけですから心配なさらないで下さい」

とは言つても怪我をさせた事に変わりは無い。やはり気になる。

「まあ、怪我も軽くて済んだからヨシとしよう。で、駅を見ていて何かわかったのか」
新たに不具合が見つかった事は収穫だったが、それに対する政策はまだはっきりと決めてはいない、そこでもう一度市民の声を聞いてみる事を議長に報告した。

「そうか、まあこの件は君に任せているからよろしく頼むよ。困ったことが有れば言ってくれ。協力はする」

議長の心強い言葉を胸に秘めて、この件をやり遂げる決心をした。

そこに私の携帯が鳴った。自治会長からだ。

電話に出ると今から自治会館に来てくれとの事だった。

「では私はこれで失礼させて頂きます。帰ってさっそく取りかかります」

「白田さん、資料まとめておきますから」

議長が車で送ってくれるらしいのでお言葉に甘える事にした。

かおりさんと奥様に礼を言っておは議長宅を後にした。

「あの、議長は駅前の渋滞の様子は御存じだったのですか」

ふたりきりになった車内で私は聞いてみる。

「歳をとると頭も堅くなってなあ、そこに君みたいな若い考えを持った議員が来てくれた。期待しとるよ、けどあそこは簡単には行かんぞ」

はい、と力強く返事をした。議長やかおりさんは期待してくれているんだ。

「まずは、コイツを何とかせんといかん」

議長は夕焼けで赤くなった巨大建造物を指差した。

着いた、自治会館だ。あまり人がいる気配が無い、電気も点いていない。

「おお、来たか。」

声のする方を向くと長老、いや自治会長がこちらにゆっくりと歩いて来た。

「ワシも来た所だ。まあ、先生入ってくれ」

広い集会場にパイプ椅子を置いてふたりは向かい合って座った。

「なあ先生、あの空き地には何を建てる気だ？ 候補がいくつかあるはずだが、そいつを教えてもらえないかな」

「いえ、まだ何も。知っていればお教え出来るのですが」私ははぐらかした。

確かに何社かから問い合わせは来ているがそれを教える訳にはいかない。

「ふうん、まあいいや。けど先生コンビニだけはやめてくれよ。店前で変な連中に

騒がれたら迷惑だしな」

長老の危惧もわかる。しかし、コンビニも候補の一つに上がっているのだ。

「話はそれだけでしょうか、でしたら私はこれで」

立ち上がり、椅子を方付けようとすると長老はちよつと待てと言う。

「今日、駅にいただろ、一緒にいた女は議長の娘だな」

ドキツとして長老の顔を見た。見られていたのか？ 彼女の事も知っているんだ。

それが何か、と聞くとニヤリと笑い話を続けた。

「先生、まさか議長のいいなりになつていんじゃないだろうなあ、ワシらは昔からアイツは信用しとらんだ。次の選挙に当選したいならワシらを裏切る様な真似はよせや」

地元の後押しがなければ確かに当選は難しい。

「大体あの女と先生じゃ釣り合わんよ。嫁が欲しいならワシが紹介してやる」

私は高齢者の為を思って活動をしてきたのだ。嫁が欲しくてでは無い。

この案件を上手く進められれば議会での私の位置付けも上がるだろうし、議長も重用してくれるだろう。そうすれば地元良くする為の活動もやりやすくなるだろう。

家に帰り、ご飯を食べながらテレビのニュースを見ていた。

景気の良いニュースは何もなく、事故や事件ばかりだった。

車が誤って踏切に進入して電車と接触した事。

スーパーでブレーキとアクセルを間違えて踏んでしまい店内に突入した事。

高速道路に原付で進入して捕まった事、どれも高齢者が起こした事件だった。

本当に怖いな、何も分からずに死んでしまう事だって有るんじゃないのか。

高齢者に優しい街造りか。本当に出来るのかな、不安になって来た。

ただ、さっきのニュースみたいな事件がこの街でもいつ起こっても不思議ではない。事故を未然に防止する為にも対策はしておいた方が良いだろう。

けど駅前の渋滞の原因が高齢者たちにも有るからなあ。

あんな危険な状態で何故老人達は街をウロつくんだらう。

私の地元であるこの辺りも住人の高齢化が進み、利便性を求めて駅近辺に引っ越す人が増えて来て、空き家を見かける事も多くなった。

長老も、コンビニが嫌とか言うんだったらもつと静かなトコロに引っ越せば良いのに。

いかなな、愚痴っぽくなってしまった。

食事を済ませて風呂に入り、自分の部屋のパソコンの電源を入れてメールを見る。かおりさんからメールが届いていた。

「今日はお疲れさまでした。資料まとめておきましたので添付しておきます。アンケートの件、決まりましたら連絡頂けますか。」

早速アンケートの原紙を作製した。予め二人で話し合っていたので直ぐに完成した。これをメールに添付してかおりさんに送信した。

「アンケート用紙の確認しておいて下さい。明日八時に駅前にて配布致します。」五分後、メールの返信が届いた。

「了解しました。わたしもお手伝いいたします。おやすみなさい。」怪我の程度も気になるが手伝ってくれれば本当助かる。

さて、後はこいつをコピーして完成だ、頑張ろう。

次の日私は大量のアンケート用紙を入れた紙袋を抱えて駅に向かった。

まず駅員に券売機の脇に回収箱を置けるようお願いをした。

OKをもらい、箱を設置した後階段を下りて行くと、かおりさんが来ていた。

足取りも軽く駅前を通る人達に元気良く挨拶をして用紙を手渡しして行く。

アンケートは簡単に記入出来る様に選択式にしてあり、不満や要望を別に記入出来る様に別欄を設けてある。記入する時間が無い急いでいる人には帰りにでも回収箱に入れて下さいとお願いをしておいた。

とにかく多くの人の意見を聞きたかったから、本当にたくさんアンケートを配った。

そこには他の街の人もいるだろうが、それも参考にさせてもらおうつもりだ。

九時を回って人通りも徐々に少なくなって来た頃、高齢者の集団が駅前に集まって来た。

中には見た事のある人もいる。地元の自治会の人も何人かいた。

その人達にもアンケートを渡す。が、反応は良くない。

「こんなのやったって、意味無いよ」「誰も望んじやいない」「わたしらは今のままで充

分なんだよ」この何人かが意見を言いだすと大挙として騒ぎだす雰囲気は本当に嫌

いだ。

「コーヒーでも飲みに行きましようか」

私の困り様に見かねたのか、かおりさんは気分転換を勧めてくれた。

私達は回収出来たアンケートに日を通した。

「みんなストレスを感じているんだなあ。乗車制限は必要なのかなあ」

「無理ですよ、通勤特急とか通勤快速とかで、早く多くの乗客を主要駅に送る様になっっているんですもの。いまさらゆとり乗車は出来ないでしょう。電鉄会社から苦情が出ます」

だよねえ。十分〜三十分の間だけでも我慢してもらうしかないのか。

「今回は電車内での話では無く、電車に乗るまでの意見をまとめて行きませんか？」

元々は駅前の渋滞緩和と安全を両立させる策をたてるのが目的だ、そうしよう。駅に着くまでにストレスを感じないでいれば電車の中くらいは我慢してくれるだろう。

しかしここでも年代別での不満が書かれている、やはり共存は無理なのかな。ジジイどもがとか、この若造がみたいに思っているんだろうなあ。

「私はこれから市役所に行きますので。かおりさんはここで。今日も有り難うございました。なにか御座いましたら連絡してください」

「解りました。では、明日の朝にでもアンケートは回収して内容をまとめておきますので。また送ります。では、失礼します」

駅前のコーヒーショップを出て市役所に向かう途中、踏切に捕まってしまった。

はあ、又か。たまに後ろを振り返るとその度に列を成す人、自転車、車が増えて行った。電車の往來を知らせる矢印が消えて踏切が上がる、みなそう思ったのも束の間、再び矢印が点灯した。辺りからはため息、罵声が聞こえて来た。

道路は大渋滞、歩道には収まりきれない程の人や自転車の群れが出来ていた。

これは本当に酷い。酷過ぎる。この様子を私はカメラで撮る事にした。

踏切が役目を終え、久々に頭上に戻っていき、人々は慌ただしく行き来を止めた。一斉に人が動き出すので線路を横切り時も周りに注意しないと事故に逢いそうだな。みんな怖い顔をしている。家を出た時はこんな顔ではなかっただろうに。

渋滞を緩和するには、電車のスムーズな運行が必須だ。

それを阻害しているのは、高齢者って事か。

私の頭の中はいつの間にか「高齢者に優しい街造り」から、「高齢者をどうにかしない」と

に変わって行っていた。

やっと道路も空き、道行く人々もにこやかに行き来が出来る様になった。

市役所に着き、議員室に向かい、先輩議員と話をする。

そこでは議会の事では無く次の議員選挙について語られていた。

「選挙前だし、本当はこんな事をしている場合じゃないんだよなあ」

「そうだなあ。この市はちょっと油断すると簡単に落選するから」

そう、だから私も必死に成果を挙げようとしているのだ。

仕事を終え、帰りに駅に立ち寄る事にした。かおりさんがアンケートは回収してくれる手筈になってはいるが様子だけでも見に行ってみよう。

仕事帰りのサラリーマンが回収箱にアンケートを入れていた様子が見えた。

箱を見ると結構な量の用紙が入っていた。

まだ夕方なのでまだまだ増えるに違いない。

それを確認して私は駅を後にした。

市民の声を聞く事はやはり良い事なんだなあ、と一人満足気になっていた。

家に戻り、夕方の駅の状態をかおりさんにメールで知らせておいた。

メールの返信が届く。回収した用紙と一緒に確認しませんか、との事だったので、私の仕事が終わる明日の夕方に議長宅におじゃまさせて戴く事になった。

高齢者が原因で駅前の渋滞が発生している事や理不尽な事故が発生しているのは事実だ。

明らかに今のシステムにマッチしていない。

では、高齢者だけで生活したらどうなるんだろう。不自由なく、満足に生活して行けるのだろうか。これは考えてみる必要があるか。

次の日の夕方私は足早に議長の家に向かう。

応接室を借り、アンケート用紙を一枚一枚見ていた。

やはり年代間での不満が多い。なぜ老人にそこまで気を使う必要があるのか？と言った意見や、若者が高齢者の乗車の妨げになっている、と言ったものも。

譲り合いや思いやりの気持ちを持った意見は無かった。

自身の行動を妨げる存在を目の前から排除してくれ、そう言いたいのだろう。

具体的に改善案を書かれていたものは見当たらない。愚痴が書かれているのだ。困ったなあ、これでは政策に落とし込めないじゃないか。

「私が決めちゃってもいいかあ」思わずそうつぶやいてしまった。それを聞いたかおりさんは目を輝かせる。

「そうですよ！ 市民はきっとそれを望んでいるのではないのでしょうか？」
そんなに喜ばれても困るんだけど、けど、きっと反対意見も出ると思うよと言うと、
「歴史に名を残す程の人は反対意見に動じずに自身の意思を通す人だとは思いませんか」

私のやろうとしている事はそんなに大それたものでは無いのだけだなあ。
彼女の言葉は響いた。やってみるか。

そこに議長が応接室にやって来て、空き地の使用方法を決めてしまえとせっつかされた。

すっかり忘れていた私は慌てた。駅前の渋滞緩和に気を取られていたのだ。
渋滞緩和、高齢者、年代別、事故、未然防止、老後施設、バス、空き地、コンビニ。
耳にしたキーワードをまとめていく。

そうだ。私の頭の中で全てがまとまった。

「議長、空き地にスーパーを召致してもよろしいでしょうか」
応接室で私は二人をまえにして話を始めた。

「それは君の総意と思っても良いのかな？」
話を全て聞き終えた議長は私に問い正した。

「多少の反論は出ると思いますが、これでイイと思います」
「分かった。では、その内容で議会に提出する様に。あと自治会での話し合いに使う資料も作っておくようにしておいてくれ」議長はニヤリと笑い、応接室から出て行った。

「では、資料の原案は白田さんが作成してわたしが発表用にする、と言う事で」
「分かりました。早速制作にかかります。出来次第お送りしますので」
私は議会で早く了承を得たかったので急いで家に帰り、資料を作る事にした。

「あの、本当にあの内容でよろしいのでしょうか、早急過ぎませんか？もう少し熟考されてから決断されてもよろしいのかと」

玄関先でかおりさんが言って来た。私の話の内容に腑に落ちない箇所でも有るのか。

遅くても明日までには作っておきたい、議会を通過させ、スーパ側面に打診をして、全てを揃えてから土曜日の自治会との話し合いを迎える、そういう青写真を描いていた。

帰宅後パソコンで資料作りに取り掛かる。寝る時間も惜しい、それ程の勢いだった。見出し、現在の状況、アンケートの結果、改善案、それらを総合的に評価して、私の「高齢者に優しい駅前再開発計画」の原案は完成した。

急いでかおりさんにメールを送った。時計は午前四時だったが、一秒でも早く見て欲しかったから。

しかしいつまでたっても返信が無かった。

気にしつつも、議会に出席しなければならぬ為、私は市役所に向かった。

議会に入ると、早急の案と言う事で、予定を変更して老人養護施設の新設案および駅前再開発計画の説明を命ぜられた。緊張しながら徹夜で作りあげた資料を読み、他の議員達に説明をして行く。

話を終えると反対意見や質問を遮り、強硬採決に議長は踏み切った。これで良いのか？

全議員二十四名のうち、賛成十四、反対十で私の案件は可決された。

議長は即座に私に退席を促し、各業者と話を進めて来いと言った。

議会に出席していた市長も何も言わない。恐らく議長が裏から手を廻しているのだろう。

反対勢力の怒号をよそに議会を抜け出て業者とコンタクトを取る。

最後のピースが埋まった。この時点で私の思い描いた構想は完成した。

後は土曜日にウチの自治会に説明すれば良いだけだ。

土曜日の朝にかおりさんからメールが届いていた。知り合いの弁護士の依頼で仕事の手伝いをしていた為、大阪の事務所にずっといたらしい。

連絡が途絶えた事を彼女は詫びていた。お詫びとして今日、夕飯を一緒にとる約束をした。

美味しい夕飯をかおりさんと食べられるように今日はがんばろう、と決意して自治会館に入ると、既に議長や他の議員達、建設業者、バス運行会社、電鉄関係者、そしてスーパの担当者が待合室に集まっていた。

集会スペースにも前回同様、長老をはじめ高齢の地元住人達が集まっていた。

地元住人には入場時に私の作った最終案をプリントアウトした冊子を渡ししてある。早速私は軽く挨拶をしてから、説明に入る。

「お渡し致しました冊子をご覧になりながらお聞きいただきたいと思います」冊子を一齐にめくる音が聞こえて来る。私は話しを続けた。

「まず、今回新たに建設致します老人養護施設の空き地だった箇所の使用方法が決まりましたので、報告させていただきます。〇〇マーケットの建設が決定いたしました」

スーパ担当が起立して挨拶をした後に住人から質問が相次ぐ。

コンビニの招致に消極的だった長老はギロリと鋭い視線で私を見つめた。

あらかたの質疑応答が終わると続ぎの説明に入る。

「前回の会合にて挙げられておりましたバスの運行時の安全についてですが、施設のバスの連行を優先にする為に、現在運航されております路線バスは廃止することになります」

会場内はザワつきが一層激しくなった。廃止する理由は何だ、の質問に答える。

「答えは簡単、採算が合わないからです。この地区の方が市の中心部に行かれる場合、路線バスを使われない方が大半です。苦渋の選択でしたが皆さまの安全を第一に考えますとこの形にするのがベストかと考えました」

ため息をつく人、頭を垂れる人、頭を左右に振る人、表現はそれぞれだったが、その様をひとことで現わすなら「落胆」だろう。

「当然、公共機関を使用して駅周辺に行かれる方もおいでだと思いますので、現在建設中の老人養護施設の一階に市役所の出張所を開設する運びとなりました」

そこスーパにはATMを設置するので、無理してわざわざ山手から降りて行く必要は無いのだ。この地にいるだけで必要最低限の生活は出来るのだ。

この地区をモデルケースとして、市内の山手の他地区に水平展開するのだ。

こうすれば駅を中心とする繁華街の人混みは改善され、年代別のいざこざも無くなる。

「なあ先生よ、これは、ワシらを隔離する政策かい？　ここでジツとしていろって事かい」

長老の意見に同調した者達が立ち上がり、大声で私の政策を非難する。

場内の温度が数度上昇したのが分かる。が、こんなの想定内だ。

「みなさん、お忘れですか？ 私の政策は、高齢者に優しい街造り、ですよ？ あんな危険な駅周辺に行かずともこの地で安全に暮らせるのです。いいじゃないですか」

会場は先程までとは打って変わり、シーンとしていた。席を立つ者も出て来た。私は淡々と話を続けるが、もう質問をする者もいなかった。この会場にいる全ての人が私の意見に納得した瞬間だった。

「それでは他に質問も無いみたいなのでこれにて閉会とさせて戴きます。尚、この案件はこれにて決定とし、工事に着手致しますのでご了承のほどを」
集会が終わり、地元の住人や他の議員達、業者さんは自治会館を後にした。

議長はポンッと私の方を叩き、「御苦労さん」と言ってお出で行った。
私は怖い顔をしている長老と話を始めた。

「これで一件落着ですね。今後も御協力の程を」
「何を言っておる！ ワシはお前に期待をしておったのに、それを」
「だってもう決まっちゃったんだよ？ 諦めなよ。」

「そこですね、次回の選挙にも是非」
はなしの途中で長老は大声を出して人を呼んだ。

そんなに怒る事無いじゃないか、私は帰る事にした。
ゆっくりと坂道を下る。夜風がやたら心地良く感じられる。ああ、この達成感。
自治会館を出てから歩いて三十分後に駅前のイタリアンレストランに到着した。
ドアの入り口に立ち、ネクタイをキュツと結び直してから店内に入る。
店の中に入り見渡すと、一番奥のテーブルにかおりさんが座っていた。

「遅くなりました」
そう言って近付いて挨拶をすると、かおりさんは立ち上がり会釈をする。
同じテーブルには、さっきまで一緒だった議長も座っていた。

二人は赤ワインを嗜んでいた。
「お疲れさまでした。どうぞお座り下さい。」
かおりさんの注いでくれたワインを味わう。今日の仕事の達成感を感じながら。

「あまりお手伝い出来ずに申し訳ありませんでした。けどもう、決定されたのです
ね」

「とんでもない、大いに助かりました。本当に感謝します。私の後押しをしてくだ

さった議長にも本当に感謝しております」

「いやいや、大変なのはこれからだぞ」

テーブルには私用の食事が運ばれて来る。美味しそうだ。

前菜や肉料理が私の目前に置かれた。

「君の頑張りに対してお礼だ。食べてくれ」

それではお言葉に甘えて、私は少しずつ口に運び味わいながら黙々と食事続ける。グラスが開くとかおりさんがワインを注いでくれる、時折目が合っては笑顔を返してくれる。とても幸せな一時を過ごしていた。

「なあ白田君、ワシは君と娘を一緒にするつもりだったんだが……」

ええっ？ あまりに唐突な議長の言葉に私はビククリして食べ物をのどに詰めてしまった。せき込む私を見てかおりさんが口を開く。

「いいえ、あんな地元の方達を蔑ろにされる方とはお断り致します」

彼女はとても冷ややかな眼で私を見ていた。

「そうだよなあ、ワシもそう思うよ。かおりにはもっと立派な男を見つけてやるからな」

議長は豪快に笑い飛ばした。

二人はガタガタと立ち上がり帰り支度をして速攻で店から出て行った。

私は未だにむせていた。待ってくれ！ と言いたいのになんか発せられずにいた。

広い店内に私一人だけが途方に暮れていた。

店員もどう接して良いのか分からないみたいで、とりあえず愛想笑いを浮かべていた。

ドラマサレタ。

もっと早く気付くべきだったのか、いや思い返せばかおりさんは何度も考え直す事を言ってくれていた。

途中までは順調だったのだ。やはり私が途中で間違った方向に行ってしまったのだ。悔やんでも、もう遅い。全てが決まった後だから。

そして3ヶ月後の市会議員選挙で、私は当然落選した。